雛の館－資料１２

三人官女（鈴木家蔵）

江戸後期には、雛段飾りの諸調度品と共に添え人形の製作が顕著になる。

この雛人形もそのひとつ、女官を最小限の３人にまとめ三人官女に仕立てたあたりはおもしろい。

中央は島台を持ち、左右の官女は銚子を持つ。用具はいづれも彫金で、全体的に豪華精巧にできている。

古式享保雛（國井家蔵）

雛が様式化され段上の雛が姿をみせ始めたのは、寛永時代に端を発したものと思われる。元禄時代に雛道具も加えられ、更に華麗さをもつようになる。

この雛は、元禄雛に非常に近く（女雛の袖口にご注意下さい）。豪華さを競った享保雛への移行時期のものかと思われる。

古今雛（富樫家蔵）

古今雛は、享保雛（１７１６～）より約５０年後即ち明和（１７６４～）以降、有職雛や次郎左工門雛に示唆をえて、新型の雛が誕生した。この雛を古今雛と呼んでいる。本品は、緑地金襴の狩衣に紫八藤丸紋の袴をつけた男雛は珍しい。女雛は、狩衣地の共裂（ともぎれ）による十二単の唐衣をもちいている。なお、面立ちも美しく、気品が漂う原舟月系の江戸雛である。

元禄雛（槇家蔵）

本品の頭は非常に古く、冠と頭が一つで髪も冠も墨でぬっている。女雛も同様で天冠はつけていないのが、この時代の雛の特徴となっている。容姿は後世の享保雛に近い。したがって時代的変化をうかがうに貴重なお雛さまといえる。

有識雛（田宮家蔵）

有識雛、または直衣雛とも呼ばれる雛である。御所における常装束をそのまま調製したもので、これがこの名の起こりである。

男雛は狩衣、女雛は桂袴（うちきはかま）を着けている。当時の公卿の生活を偲ぶことができる。

稚児雛（竹谷家蔵）

本品は、芥子雛の一種で、小さく可憐なお雛さまである。稚児雛は、江戸後期の文政（１８１６～３０）年間に流行したものである。雛の頭上に高く輪を左右に作られ独特な容姿をしている、

これを稚児髷（まげ）と云う。元服前に結ぶ習わしで別名稚児輪とも称している。面（おも）立ちも美しく、保存が良好である。

五人囃子（細谷家蔵）

古今雛（１７６４～）として新たに世に出たのが十代将軍家治の時。しだいに古今雛が定着したころに、添え雛として登壇したのが五人囃子である。この五人囃子は有職故実にもとづいたところから、有職五人囃子と呼んでも過言でない。本品は雅楽演奏する管方（かんがた）で京都製である。

親王雛（鈴木家蔵）

有職雛と町雛との間をいったもので、江戸後期の作。かしらは玉眼で、男雛は３０ｃｍ、白綾の有紋の束帯は珍しい。女雛は２３ｃｍで髪はおすべらかしに結び上げ、小袖は白絹の襟を七枚美しく重ね、唐衣（からぎぬ）、五つ衣や懸帯（かけおび）には紐房を附け、単も赤の繍（しゅう）文様と古今雛に近い姿である。額当（ぬかあて）が欠けているのが残念であるが保存もよく整っている。

享保雛（河北町紅花資料館蔵）

雛人形の歴史の中でもっとも豪華で華美の時代といわれている。その姿は角張っており、女雛は五衣、唐衣、裳を着け、着地はいづれも金襴や錦を使っている。この雛は本町内に享保雛でも小振の品で５０糎位のものである。

古今雛（河北町紅花資料館蔵）

古今雛は江戸池の端の大槌屋が新作の雛を考案し、人形町の原舟月に製作させたのが始まりで、明和（１７６４～）時代に世に出たのが古今雛である。本品は江戸古今雛をルーツに、京都でも有職雛に示唆をえて写実的容姿と、見た目に美しい装束をつけており、その人気は素晴しく、後世に受け継が れている。
（京都製）

立雛（國井家蔵）

雛は当初紙雛で登場する。男雛は袖を左右に張り、女雛は円筒形で熨斗（のし）形の立雛であった。
後世において室町や桃山風俗を摸した衣装を着せた裂地製のものが作られるよう

になる。
この立雛は、天保１２辛丑（かのとうし）年（１８４１）の箱書があり、男雛は緋菱綾地に枝垂桜と松の刺繍で優雅に表現されている。女雛も共裂の衣裳の熨斗形であり、工芸的に優れた立雛といえよう。

有職束帯雛（ゆうそくそくたいびな）

（須藤家蔵）
　男雛の衣裳は、有職装束（ゆうそくしょうぞく）の黄櫨染（こうろぜん）の御袍（天皇が儀式に着用）、女雛は有職衣装です。江戸時代より継ぐ京人形司の五世大木平蔵氏が作り上げた逸品です。
　頭は面庄製、男雛の笏は象牙製。
大正末期　男雛３０ｃｍ。